

誕生日に思うこと

開戦の年の8月に生まれた私にとって8月はComplexityな時である。誕生日が長崎の原爆記念日と敗戦記念日の間にある。12日は日本航空123便の事故（原因が未だ定まらない不思議な事故）6日から15日は憂鬱である。憂鬱な気分には怒りが含まれていると感じている。なぜ、この期間に自分の誕生日があるのかを毎年考えさせられる。

（今年は「日航123便事故40年目の真実」を読んだがやはりモヤモヤは残る）

それに加えて4年前からもう一つの憂鬱が加わった。8日の片山 克さんの召天日である。今年もこの時期には体調が崩れ伏していることが多い。夢か、目を休ませていた時かは定かではないが、目の前に動いている巻物が現れた。文字は隠された状態、全体がボウーとゆっくりと動いて所々に自分に思い当たることがあった。暫くして、それが自分の経歴書であることが分かった。ゆっくり動いているがはっきりとは読めない。ところが、ある瞬間、ある文字がくっきり一行だけ浮かび上がり消えていった。それは「朴の道」だった。そして思った、「神様の目には全てが裸である」ことも。これが最後に読まれる巻物なのかもしれないとも思った。（「朴の道」についてはベストピア第441号参照）

朴の道は真にComplexityな物語である。忘れっぽい私にさえも忘れることができない書物である。登場人物である鍵山秀三郎氏も鬼籍に入られた。この世で事実を知る者は二人となった。しかし、神様はご存知である。

毎年、広島・長崎の原爆記念式典では、時の総理大臣はなべて「核兵器のない世界」「恒久平和の実現に向けて力を尽くす」と読み上げるが、読み終わった瞬間に忘れていいのか具体的な行動には出ない。石破さんさえ核兵器禁止条約には触れることができない。虚しい式典のように思われる。しかし少数でも真に平和を求める人がいることを知るだけでもひとときの救いにはなるが、頑張っているのは当事者だけだと思われる昨今である。

そのよう中でも核心をつく発言がある。

昨年もベストピアで引用したものだが広島県の湯浅英彦知事の発言を振り返ってみる。

いわゆる現実主義者は、力には力を、。核兵器には、核兵器をと言う。

しかし、そこでは、もう一つの現実は無視されています。

人類が発明してかつて使われなかった兵器はない。禁止された化学兵器も引き続き使われている。核兵器も、それが存在する限り必ずいつか再び使われることになるでしょう。

今年の同氏の挨拶を抜粋する

核抑止が益々重要だと声高に叫ぶ人達がいいます。しかし本当にそうなのでしょうか。確かに、戦争をできるだけ防ぐために抑止の概念は必要かもしれません。一方で、歴史が証明

するように、ペロポネソス戦争以来古代ギリシャの昔から、力の均衡による抑止は繰り返し破られてきました。なぜなら、抑止とは、あくまで頭の中で構成されたまた念、又は心理、つまりフィクションであり、万有引力の法則のような普遍の物理的真理ではないからです。

見事な指摘だと私は思う。更に続けて

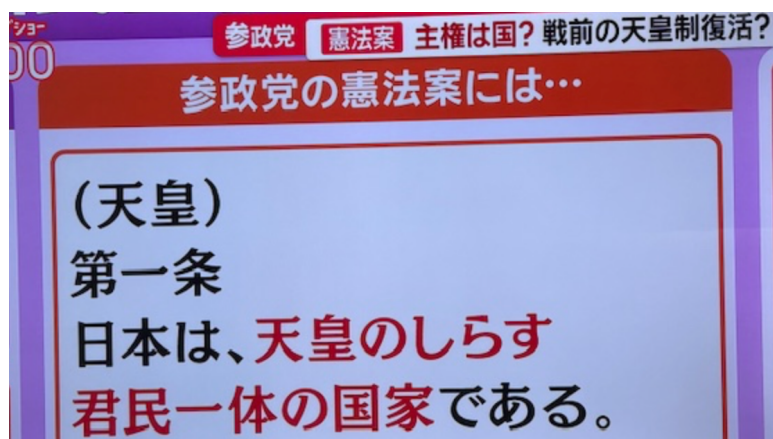
自信過剰な指導者の出現、突出したエゴ、高揚した民衆の圧力。あるいは誤解や錯誤により抑止は破られてきました。我が国も、力の均衡では圧倒的に不利と知りながらも、自ら太平洋戦争の端緒を切ったように、人間は必ずしも抑止論、特に核抑止論が前提とする合理的判断が常に働くとは限らないことを、身を以て示しています。

ここで「高揚した民衆の圧力」が指摘されている。独裁者に煽動された民衆は、無意識の内に高揚して罠にはまってしまう。これは日清日露戦争、第一次世界大戦で日本にも顕著に見られた現象である。熱狂的な独裁者のもとでは人民も熱狂的（ファナスティック）になる、そのエネルギーが独裁者のエゴを強化する悪循環に陥る。更に、同氏は言う。

抑止力とは、武力の均衡のみを指すものではなく、ソフトパワーや外交を含む広い概念であるはずだ。そして、仮に破れても人類が存続可能になるよう、抑止力から核という要素を取り除かなければなりません。核抑止の維持に年間1兆円超が投入されていると言われているが、その十分の一で核のない新たな安全保障のあり方を構築するために頭脳と資源を集中することこそが、今我々が力を入れるべきことです。

このような良心に忠実な意見は毎年減少傾向にあるように思われる。昨年「日本被団協のノーベル平和賞」受賞にもかかわらず、その平和の声は過激な指導者の出現によって弱められ、国民も同調の傾向が見られることに危惧を覚える。

参政党（核武装が最も安上がりだと喧伝している）の支持率は全国平均で12%と野党のトップに躍り出た。驚きは広島県と長崎県では支持率が13%になっていることである。平和教育を最も徹底してきている広島で、なぜこのような現象が起こるのか。すでに煽動され始めているのではないか。



同党は憲法改正案を作成している。詳しくは触れたくないが、天皇と国民について過日報道された番組から引用して、読者によく考えて頂きたいと願う。

「しらす」とは、明治憲法起草の時に用いられた言葉で「知らしめる」即ち、統治することを意味する。

国民の要件は「日本ファースト」丸出しである

国民の要件は、
父または母が日本人であり、
日本語を母国語とし、
日本を大切にすることを
有することを
基準として、法律で定める。

もちろん核兵器禁止条例には反対である。このような政党が野党第一党になる。そればかりでなく、自民党と連合するとどうなるだろうか。喜ぶのは誰であろうか。

アメリカは日本に軍事費をGDPの3.5%を要求しているという。その意味が報道されている。下のように20兆円近くが防衛費となる。実質GDPが増えると増えるだけこの額は増える。戦争を放棄し軍備をしないと憲法に定められている我が国の防衛費が、年金や医療への歳出額を大幅に上回るという。どうなるのだろうかと恐怖を覚えない人はいないだろう

世界は核を使用しようとする。日本も自衛を超える軍備費を持つことを想像すると恐ろしくなる。



広島県の湯浅英彦知事知事の言葉を噛み締めて心しないと、再び「高揚した民衆」になりかねない。ま

ずは憲法9条を死守することが最も大切なことになる。来月は再び憲法を取り上げようと思う。

広島市長も次のようなメッセージを出している。

鈴木史朗市長=2025年8月9日午前11時6分、

1945年8月9日、このまちに原子爆弾が投下されました。あの日から80年を迎える今、こんな世界になってしまうと、誰が想像したでしょうか。

「武力には武力を」の争いを今すぐやめてください。対立と分断の悪循環で、各地で紛争が激化しています。

このままでは、核戦争に突き進んでしまう――。そんな人類存亡の危機が、地球で暮らす私たち一人ひとりに、差し迫っているのです。

以上のような物騒な世情になっていく中でも広島の子供たちは毎年「平和への誓い」を発して戦争のない世の中を作ろうと訴えている。今年も次のように宣言された。子供たちの期待に応えねばならないと思う。

小学生によるこども代表「平和への誓い」

今年は第31回になる。

いつかはおとずれる、被爆者のいない世界。

同じ過ちを繰り返さないために、多くの人が事実を知る必要があります。

原子爆弾が投下されたあの日のことを思い浮かべたことはありますか。

昭和20年(1945年)8月6日午前8時15分。

この広島に人類初の原子爆弾が投下され、一瞬にして当たり前の日常が消えました。

誰なのか分からないくらい皮膚がただれた人々。

涙とともに止まらない絶望の声。

一発の原子爆弾は、多くの命を奪い、人々の人生を変えたのです。

被爆から80年が経つ今、本当は辛くて、思い出したくない記憶を伝えてくださる被爆者の方々から、直接話を聞く機会は少なくなっています。

どんなに時が流れても、あの悲劇を風化させず、記録として被爆者の声を次の世代へ語り継いでいく使命が、私たちにはあります。

世界では、今もどこかで戦争が起きています。

大切な人を失い、生きることに絶望している人々がたくさんいます。

その事実を自分のこととして考え、平和について関心をもつこと。

多様性を認め、相手のことを理解しようとする事。

一人一人が相手の考えに寄り添い、思いやりの心で話し合うことができれば、

傷つき、悲しい思いをする人がいなくなるはずです。
周りの人たちのためは、ほんの少し行動することが、
いずれ世界の平和につながるのではないのでしょうか。

One voice.たとえ一つの声でも、学んだ事実思いを込めて伝えれば、
変化をもたらすことができるはずです。
大人だけでなく、こどもである私たちも平和のために行動することができます。
あの日の出来事を、ヒロシマの歴史を、二度と繰り返さないために、私たちが、
被爆者の方々の思いを語り継ぎ、一人一人の声を紡ぎながら、
平和を創り上げていきます。

令和7年（2025年）8月6日

こども代表

広島市立皆実小学校 6年 関口 千恵璃

広島市立祇園小学校 6年 佐々木 駿

啞然とする時代格差

今年のNHK朝ドラは評判がいい。昭和の初めから戦争の期間を経て戦後の復興への期間の物語である。私が特に注目したのは特攻に出征する母の気持ちを描いた場面である。大日本（国防）婦人会の地区の幹部から監視され、出征兵士が「行って参ります。」と言うとおばさん幹部が「行きます。でしょう」と言い直させる場面である。行きますは「逝きます」を意味している。それを聞く母親の涙は、悔し涙か？天皇のために取られる命が生きるより尊いとされた時代をよく表現していた。

毎日15分という短い時間の中で次へ続く見せ場を作る編集は見事である。

物語には惹きつけられるが、放送の始まりのテーマソングが理解不能なのだ。多くの人が指摘していることだが、NHKにどんなポリシーがあるのか分からない。あえて想像すると若い人に見てもらいたいという願いがあって、若い視聴者を開拓するために超スピードのある音楽が選ばれたのだろうか？私には歌詞が全く分からないが、20代の若者には分かるという。時代の格差に驚いた。彼らと会話するにはその意味を知る必要があると思い全文を調べたので、ここに模写することにした。読者の皆さんはこの歌詞をそのように解釈されるのだろうか。多様性を認めるということはこのようなところにも現れている。

「あんばん」歌詞

涙に用なんてないっていうのにやたらと縁がある人生

かさばっていく過去と 視界ゼロの未来

狭間で揺られ立ち眩んでいるけど

「産まれた意味」 書き記された 手紙を僕ら破いて

この世界の扉 開けてきたんだ
生まれながらに反逆の旅人

人生訓と経験談と占星術または統計学による
教則その他、参考文献 溢れ返るこの人間社会で
道理も通る隙間もないような日々だが 今日も超絶G難度人生を
生きていこう いざ
いつか来たる命の終わりへと近づいてくはずの明日が
輝いてさえ見えるこの摩訶不思議で 愛しき魔法の鍵を
君が握っててなぜにどうして? 馬鹿げてるとか 思ったりもするけど
君に託した 神様とやらの采配 万歳

この風に乗かってどこへ行く
生まれたての今日が僕を呼ぶ
「間違いなんかない」 って誰かが言う
「そりゃそうだよな」 とか 「ないわけない」 とか堂々巡れば
悲しいことが悔しいことがこの先にも待っていること知っているけど
それでも君と生きる明日を選ぶよ
まっさらな朝に 「おはよう」
感情線と運命線と恋愛線たちが対角線で
交錯して弾け飛び火花散り 燃え上がるその炎を燃料に
一か八かよりも確かなものは何かなんて言ってる場合なんか
じゃないじゃなか いざ
どんな運命でさえも二度見してゆく 美しき僕たちの無様
絶望でさえ追いつけない 速さで走る君と二人ならば
「できないことなど 何があるだろう?」
返事はないらしい なら何を躊躇う
正しさなんかにはできはしないこと ,この心は知っているんだ
There's no time to surrender(降伏する)
時が来ればお返しする命 この借り物を我が物顔で僕ら
愛でてみたり 諦めてみだりに思い出無造作に
詰め込んだり 逃げ込んだり
唯一で無二の詰め合わせにして返すでしょう
せっかくだから
あわよくばもう
命を生きよう
「いない、あげる」なんて 呆れて 笑われるくらいの命を生きよう
君と生きよう。 完

パリ通信・第164号

「セザンヌ展〜ブッフアン邸」

毎年夏が来ると南仏プロヴァンスでは音楽、演劇、ダンス、講演会など文化フェスティバルが開催される。79年目を迎えた「アヴィニョン 演劇祭」、「ラ・ロック・ダンテロン 国際ピアノフェスティバル」は45周年、野外、教会、修道院など夏ならではの会場を利用したプログラムで多くの人が集まる。中でも2025年エクサンプロヴァンスの夏はポール・セザンヌ(1839-1906)に捧げられている。



セザンヌの生まれ故郷であるエクサンプロヴァンス、とりわけ「サント・ヴィクトワール山」風景は有名だが、今回の回顧展はセザンヌの父が1859年に購入した「ブッフアン邸」での当時の生活を具体的に知る

ことができるのがとても興味深い。フランス語で「Le Jas de Bouffan」。「Jas」(ジャス)とはプロヴァンス語で「田舎の別荘」のことで、都会の裕福な階級層がプロヴァンスの夏の暑さと疫病から逃れるために所有していた館である。



セザンヌの父ルイ＝オーギュスト・セザンヌ(1798-1886)はエクサンプロヴァンスの中心地クール・ミラボー通りで小さな帽子屋を経営していたが投資の才覚がある人で、銀行投資や鉄道株式で財を成し、1859年15ヘク

タールの「ブッフアン邸」領地を購入する。現在の館は1730年頃から建てられ、領地内には豊かな水脈があり、人を使って野菜や葡萄栽培を行っていた広々とした領地である。館はセザンヌの死後売りに出され大きく改装されたが、最終的





にエクサンプロヴァンス市が所有者となり、セザンヌが生活していた当時の館に戻す修復が進行中である。

エクサンプロヴァンスに生まれたポール・セザンヌは、1857年から1862年までマルタ邸の一部で開かれていた無料のデッサン学校(1949年から現在のグラネ美術館に成る)に在籍してい



た。1859年父親が購入した「ブッフアン邸」に一家が住み始めるのは1870年からで、購入直後からセザンヌはサロンの壁に絵を描き、内装に携わっていた。1860年頃の初期作品が「四季」と題された油彩の壁画である。向かって左から「春」「夏」「冬」「秋」の順番で配置されたそれぞれ高さ315cm x 幅100cm の女性たちで、「近代絵画の父」と呼ばれる後期セザンヌからは想像し難い作風だ。「ブッフアン邸」が売りに出され所有者が変わると、作品は上に壁紙が貼られたり、売却されたりした。セザンヌの初期作品に興味を持つフランス人は居らず、日本、ドイツへと売られていった。

「四季」と同じくサロン壁画としてセザンヌが模写した「かくれんぼ遊び」(1860-1862頃)(168 cm x 222 cm)(ニコラ・ランクレによる)は、尾道市「なかつ美術館」に所蔵されている。漆喰の壁に直接描いた油彩を壁ごと剥ぎ取り、絵の具層だけをキャンバスに残して売却されたのである。

4人の女性「四季」の中央に描かれたのがセザンヌ最初の肖像画「父ルイ=オーギュスト・セザンヌ」だ。ポール・セザンヌにとって父親は無くてはならない大切な存在だった。

「ブッフアン邸」内を改装してアトリエを持つ資金を提供してくれた。創作だけに没頭できる支援を生涯受けたのである。太陽光が一日中安定する北に面した部屋で、壁を壊して大きな窓を設け、内部を灰色に塗った。このアトリエで多くの静物画が描かれた。1861年初めてパリに行きルーブル美術館を訪れ、パリのサロン、文壇、美術界を知る。エクサンプロヴァンスの父の銀行を手伝いながらパリとの往復を続ける。当初はパリのサロンに出展しても入賞はおろか落選展にも入らず、セザンヌの評価は低く、父親からの月々の支援がなければ生活は出来なかった。1869年パリでデッサンのモデルをしていたオルタンス・フィケと知り合い、1872年には息子ポールが生まれるが父親の仕送りが途切れることが心配で事実を隠していた。パリにオルタンスと息子を残して、エクサンプロヴァンスで創作活動をする生活が続ける。オルタンスと正式に結婚するのは父親が亡くなる1886年のことだが、父親の死後も家族と生活を共にすることはなかった。セザンヌにとって創作の核はエクサンプロヴァンスという場所であり、そこに生きる人々の生活であり、サント・ヴィクトワール山の風景だった。1880年以降は印象派のグループからも離れて独自の様式を探究し、キュビズムを始めとする抽象画への道を開いた。

グラネ美術館の展覧会は10月12日まで開催されている。これからフランスに行かれる方は「ブッフアン邸」と合わせて見学されることをお勧めしたい。（古賀順子記・撮影）